

0 はじめに

皆さん、おはようございます。今回リモートで話をします。

あらためて、明けましておめでとうございます。令和4年を迎えました。いよいよ3学期、学年の締めくくりの学期です。巷ではo（オミクロン）株の感染拡大が大きな課題となっていますが、勉強に、部活動に、SSHの課題研究に頑張っていきましょう。

3年生は共通テストまで残すところ9日となりました。2学期の終業式でもお話ししましたが、現役生は最後の最後まで実力が伸びます。「9日しかない」ではなく「9日もある」という気持ちで、最後の追い込みを続けましょう。もう一つ大切にしたいのは体調管理です。ベストコンディションそして平常心で試験に望めるように、規則正しい生活に努めましょう。努力は決して裏切りません。自信を持って本番に臨んで欲しいと思います。期待しています。

さて、この年末年始、皆さんにとってはどんな毎日だったでしょうか。

私は、新年を迎えるに当たって一つの目標を立てました。それは、「一月に少なくとも3冊の本を読む」ということです。1学期の始業式でもお話ししましたが、読書の良いところは、映像を見るのではなく、活字を読むことで、頭で考え想像力を高められることだと思います。今の生活を考えると、それだけの時間をとれるか不安はありますが、「時間はあるものではなく作るもの」という気持ちで頑張ってみようと思います。

1 読書の意義 ～「神様のカルテ」より～

夏川草介さんが書いた「神様のカルテ」という小説の中にも、読書の良いところについて言及した部分があるので紹介したいと思います。

「神様のカルテ」は、嵐の櫻井翔さんが主演をして映画にもなったので知っている人も多いのではないのでしょうか。この物語は、主人公の若手医師である栗原一止（くりはらいちと）が、病院で出会う患者さんや先輩の医師、同僚の医師や看護師、大学同期の親友、アパートの少し変わった住民たち、主人公を優しく見守る写真家の妻など、たくさんの人と接しながら自分自身の生き方を考えていく姿を描いています。

この物語の中に、栗原一止と、彼が担当する余命幾ばくもない患者さんとの対話があります。この患者さんは高校の国語の教師をしていた人で、たくさん本に囲まれた自身の部屋で主人公と次のようなやりとりをします。

患者 『ヒトは、一生のうちで一個の人生しかいきられない。しかし本は、また別の人生があることを我々に教えてくれる。たくさんの小説を読めばたくさんの人生を体験できる。そうするとたくさんの人の気持ちもわかるようになる。』

一止 『たくさんの人の気持ち？』

患者 『困っている人の話、怒っている人の話、悲しんでいる人の話、喜んでいる人の話、そういう話をいっぱい読む。すると、少しずつだが、そういう人々の気持ちがわかるようになる。』

一止 『わかると良いことがあるのですか。』

患者 『優しい人間になれる。』

一止 『しかし、今の世の中、優しいことが良いことばかりではないように思います。』

患者 『それは、優しさということと、弱いということを混同しているからです。優しさは弱さではない。相手が何を考えているのか、考える力を「優しさ」というのです。優しさというのはね、想像力のことでしょ。』

すごく良い表現だと感じました。自分には思いつかないような、心にストンと落ちてくるような表現で納得してしまう文章です。本を読んでいると、自分でうまく言い表せない考えや気持ちについて、こういう表現があるのかと、自分の気持ちの的を射た表現に出くわすことがあります。表現の仕方や語彙（言葉の使い方とでも言おうか）を身につける道具として、言葉を操るいわば専門家の書いた文章に触れるというのは本当に役に立つと思います。

結論として皆さんにも、たくさんの本を読む事を勧めたいと思います。そして、いろいろな生き方、いろいろな人生を知って欲しいと思います。そして、相手の気持ちがわかる優しい人間になって欲しいと思います。あまり深く考えずに、おもしろいんじゃないかなと思った本を手に取りれば良いでしょう。自分に合わないと思ったら、途中でやめれば良い。私の場合は、意地でも最後まで読みますが。

2 終わりに

さて、最後になりますが、皆さんが今年度の仕上げとして、3年生は高校生活の仕上げとして、しっかりと3学期を過ごすことを期待しています。皆さん、頑張って充実した学年末にしましょう。

以上で私の話を終わります。